特集「人文科学とコンピュータ」の編集にあたって

八村 広三郎†

このようなタイトルの特集が情報処理学会の論文誌で組まれるのは，おそらく最初のことだと思われる．このタイトルは，研究の内容は何も表していないが，その意図するところはくみ取っていただけるものと思う．すなわち，「コンピュータ」という言葉で代表される情報科学の理論あるいは情報処理技術を，人文科学の研究に応用するということを意味している．

歴史学，国文学，言語学，考古学，人類学などの人文科学諸分野は，従来は，コンピュータサイエンスや情報処理技術とはまったく無縁のものと一般的には受けとめられていた．しかし，実際のところは人文科学領域での情報処理技術の応用は必ずしも新しいものではなく，たとえば，古典のテキスト処理などはコンピュータの歴史と同程度の長い歴史を持っている．人文科学分野へのコンピュータの応用が広まってきたのは，近年のパソコンとマルチメディア技術の発展と普及によるところが大きい．また，人文科学の諸分野で研究対象としているものは多様な「情報」であり，ここには，より広い意味での「情報学」があるとも考えられる．単なる道具としての利用にとどまらず，情報科学により人文科学領域に新しい地平を与える，より高次の展開が期待される．

このような観点から，平成元年（1989年）に，この分野に関心のある研究者により，本学会に「人文科学とコンピュータ」研究会が設立され，以来，10年間にわたって活動を続けてきた．さらに，平成7年（1995年）には，本研究会のメンバーを中心とした研究者による，文部省科学研究費補助金重点領域研究（後に特定領域研究と改称）「人文科学とコンピュータ」の申請が採択された．この研究には，公募によるさらに多くの研究者の参加を得て，4年間にわたって活発な研究活動を行ってきた．

これらの研究会や科学研究費での研究には，人文科学の諸分野におけるさまざまな情報処理の応用の試みがあり，また逆に，情報処理の側からは，従来はあまり扱うことのなかった新しいタイプの情報に対する処理技術やアルゴリズムの開発などの試みがある．このような研究活動の1つの区切りをつける意味で，これらの研究成果を論文として公表する場が必要であると考えていた．

ちょうどそのようなとき，本学会においても，ゲストエディタによる論文誌特集の企画・編集が可能になり，この制度を利用した特集の企画を「人文科学とコンピュータ」研究会を中心として検討した．その結果，幸いにしてこの企画が論文誌編集委員会に認められ，ようやく，ここに実現することになった．

本特集の編集委員会は，「人文科学とコンピュータ」研究会の主査を勤めた4人，すなわち，杉田繁治氏（国立民族学博物館），及川昭文氏（総合研究大学院大学），八村（委員長：立命館大学），山田奨治氏（国際日本文化研究センター）に，さらに，論文誌編集委員会から，北橋忠宏氏（大阪大学），平川秀樹氏（東芝）が加わっていただいて構成された．

1998年1月の会誌会告により，特集の趣旨説明および論文の募集を行い，1998年8月末の締切りに対して，42編の論文の応募があった．査読は通常の論文と同じ方式に従ったが，査読者の選定にあたっては，分野の性格を勘案して，本学会の会員からだけでなく，広く当該の専門分野の方にもお願いするという方針をとった．また，担当編集委員によるメタレビューにより，総合的な観点からの判断を行った．この結果24編の論文が採録と判定され，これらを特集の論文として掲載することになった．

応募・採択された論文は，はなはだ広い範囲の分野にわたるので，本特集は通常の特集に比べて異質な印象を与えるかもしれない．今回の特集により，普段このような分野に接することの少ない読者の方々には，人文科学への情報処理技術の応用の現状について，また，情報処理から見て広い未開拓の領域があることについて感じとっていただけたら幸いである．

最後に，多忙の中，精力的に編集とメタレビューにあたっていただいた編集委員の方々に感謝の意を表したい．特に，本特集の実現は，山田奨治委員の献身的な活動に負うところが大きい．さらに，短い日程の中での査読を適切にこなしていただいた査読者の方々にも，心から感謝する次第である．

† 立命館大学理工学部情報学科